

M-GTA 研究会 News Letter No.73

編集・発行: M-GTA 研究会事務局(立教大学社会学部木下研究室)

メーリングリストのアドレス: grounded@ml.rikkyo.ac.jp

研究会のホームページ: <http://m-gta.jp/>

世 話 人 : 浅野正嗣、阿部正子、小倉啓子、木下康仁、倉田貞美、小嶋章吾、坂本智代枝、
佐川佳南枝、竹下浩、田村朋子、丹野ひろみ、塚原節子、都丸けい子、根本愛子、
林葉子、宮崎貴久子、三輪久美子、山崎浩司(五十音順)

<目次>

◇第3回合同研究会報告	1
【第1グループ】	2
【第2グループ】	6
【第3グループ】	9
【第4グループ】	12
【第5グループ】	15
◇近況報告	19
◇第69回定例研究会のお知らせ	22
◇編集後記	22

◇第3回合同研究会の報告

【日時】2014年8月30日(土)11:30～17:50、31日(日)9:20～12:10

【場所】1日目 熊本保健科学大学、2日目 桜の馬場 城彩苑

【出席者】65名

朝日 まどか(北海道医療大学)・阿曾 亮子(日本医科大学)・阿部 正子(長野県看護大学)・阿部 康子・網木 政江(山口大学)・荒木 善光(国頭村役場)・池内 香織(京都大学)・伊藤 由美子(南山大学)・今井 芳枝(徳島大学)・江尻 晴美(中部大学)・大石 ゆかり(埼玉医科大学)・大高 靖史(日本医科大学)・岡部 倫子(青山学院大学)・小倉 啓子(ヤマザキ学園大学)・長田 知恵子(杏林大学)・加藤 浩平(東京学芸大学)・亀崎 明子(山口大学)・嘉陽田 友香(沖縄県立看護大学)・河本 恵理(山口大学)・橘田 康世(東洋大学)・木下 康仁(立教大学)・沓脱 小枝子(山口大学)・久場 加寿美(沖縄県立看護大学)・倉田 貞美(浜松医科大学)・小久保 裕美

(東海学園大学)・小松 洋平(西九州大学)・坂上 和子(特定非営利活動法人病気の子ども支援
ネット遊びのボランティア)・坂上 真理(札幌医科大学)・坂本 智代枝(大正大学)・佐川 佳南枝
(熊本保健科学大学)・佐々木 竹美(順天堂越谷病院)・柴田 弘子(産業医科大学)・鈴木 優子
(埼玉医科大学)・高丸 理香(お茶の水女子大学)・田村 愛架(鹿児島大学)・丹野 ひろみ(桜美
林大学)・千葉 洋平(国士舘大学)・辻野 久美子(琉球大学)・縄馬 明人(熊本総合医療リハビリ
テーション学院)・手塚 紀子(立正大学)・得津 慎子(関西福祉科学大学)・戸塚 恵子(和泉短期
大学)・殿原 慶三(桜美林大学)・長崎 和則(川崎医療福祉大学)・長山 豊(金沢医科大学)・根
本 愛子(成蹊大学)・根本 淳子(愛媛大学)・野尻 明子(熊本保健科学大学)・野村 佳子(摂南
大学)・林 葉子(お茶の水女子大学)・平澤 園子(平成医療短期大学)・福山 美季(熊本大学)・
藤田 史恵(久留米大学)・藤好 貴子(福岡女学院看護大学)・細原 正子(香川県立保健医療大
学)・松戸 宏予(佛教大学)・松永 妃都美(佐賀大学)・美甘 きよ(岡山市保健所)・水尾智佐子・
光村 実香(医療法人財団はるたか会訪問看護ステーションあおぞら)・宮崎 貴久子
(京都大学)・矢野 淳(福岡
大学)・山崎 浩司(信州大
学)・横森 愛子(静岡県立大
学短期大学部)・和田 恵美
子(藍野大学)



【第1グループ】

光村 実香 (医療法人財団はるたか会訪問看護ステーションあおぞら)

Mika MITSUMURA : Home visit nursing station AOZORA

小児訪問リハの実践知形成プロセスに関する研究

Research on practical intelligence in the process of formation about pediatric home-visit rehabilitation

【はじめに】

近年、医療技術の発展により低出生体重児の増加や死亡数の減少などで、医療依存度の高い重症心身障害児(以下、重症児)が早期に在宅へ移行する数が増加している。このため、在宅小

児のリハビリテーション(以下、リハ)の供給不足が問題として考えられる。木原¹⁾は、小児リハにおける現状と課題を、理学療法士(以下、PT)の視点から対象となる疾患・障害の多様性や小児専門施設以外の場所での教育・研修が不十分であること、子供・家族の視点から、身近な地域で支援が受けられないことを挙げている。そして、小児訪問リハの必要性について、訪問リハ事業所スタッフの教育・研修体制の整備が急務であると述べている。実際に訪問リハで在宅小児の受け入れが困難な理由として、介護保険領域が主体となっているため対象者は成人(特に高齢者)がほとんどであること、高度医療機器である人工呼吸器や在宅酸素など医療デバイスの取り扱いやリスク管理がわからない、小児未経験ゆえの不安、重症児とのコミュニケーションが困難であることなどが考えられる。そこで本研究は、訪問リハで療法士が患児とどのようにコミュニケーションをとりながらリハを展開しているかを明らかにすることを目的とした。それにより今後の在宅小児分野の発展と啓蒙、訪問リハ事業所スタッフの教育・研修に役立て、生活支援系理学療法学の一助になると考える。

注1. 療法士:理学療法士、作業療法士、言語聴覚士などのリハ専門職のこと。

注2. 訪問リハ:居宅サービスの一種。療法士が患者宅に出向きサービスを提供する。

1) 木原秀樹:小児リハビリテーションー乳幼児期における課題;理学療法学,2013 年

【対象者】 分析焦点者:小児訪問リハに従事する療法士

※使用データは「B」と「D」

	職種	性別	年齢	臨床経験 年数	小児訪問リハ 経験年数	小児施設等の 経験年数	成人の訪問リ ハ経験の有無
A	PT	男性	48 歳	27 年	11 年	16 年	なし
B	PT	女性	46 歳	25 年	15 年	7 年	なし
C	OT	女性	43 歳	10 年	2.5 年	7 年	なし
D	OT	男性	38 歳	15 年	5 年	0 年	有
E	PT	男性	31 歳	4 年	0.5 年	0 年	有
F	OT	男性	52 歳	10 年	6 年	0 年	なし

今回は、小児経験の有無、訪問リハ経験の有無の違いにより小児訪問リハ適応のプロセスに違いがあるかを探る目的で様々な背景の対象者にインタビューを実施した。

【方法】

調査期間:2013 年 10 月～11 月

手順:金沢大学医学倫理審査委員会の承諾を得た後、対象者に研究説明書を用いて研究目的・方法、個人情報の保護、費用負担の有無等について説明を行い、同意書の署名をもって研究参加の承諾とした。インタビューは、インタビューガイドを作成し、これをもとに半構造化面接を実施した。その内容を IC レコーダーに録音し、逐語録に起こした。

【インタビューガイド】

- ①あなたが在宅での小児リハビリテーションに携わるようになった経緯について教えてください。
- ②あなたが在宅でのお子さんとのリハビリの中で大切にしていることは何ですか？ それはなぜですか？
- ③あなたが在宅小児関わる前の「在宅小児」のイメージはどんなものでしたか？
- ④実際にあなたが初めてお子さんの在宅でのリハビリを行うことになった時の気持ちをお聞かせください。
- ⑤初めて在宅でお子さんを担当した時、それまでの経験と異なり困ったことや予想しなかったことがあれば教えてください。またそれに対してどのように対処しましたか？
- ⑥あなたが初めて、在宅小児に関わるようになった時と、最近のかかわりの中でセラピストとして気持ちの変化や、アプローチ方法に変化はありますか？ あれば具体的にその内容を教えてください。
- ⑦最後に、何か言い残したことがあればお話し下さい。

感想

私は2008年の山梨で行われた合宿でもデータ提供者をさせて頂きました。その時は「ザ・合宿!!」といった感じで、同じ釜の飯を食べ、同じ湯につかり、明けても暮れてもデータの事を考え、ディスカッションしたのを思い出します。本では読んでいたものの、分析作業が初めての経験だったので身も心もへトヘトでしたが、そのおかげで合宿後はモヤモヤしていたものが晴れ、作業がはかどったのを覚えています。しかしあの時は自分のことで精一杯で、参加者の方々の専門性に触れるまでの余裕がありませんでした。そこで今回は様々なジャンルの専門性を持った方々に私のデータを見て頂き、多方面から色々なご意見を頂きながら考えを膨らまして分析していきたいと考えました。私のグループには医療系の他に、獣医学や経営学、体育学など、普段の自分の仕事ではあまり関わることのない専門家の方々が参加していました。話を進めると着眼や意見が自分の想像するものとは異なったり、または全く違う分野なのに現象が似ていることがあったり、新たな気づきを頂きました。私はM-GTA合宿に参加するのは前回の北海道を入れ、今回で3回目です。合宿の醍醐味とは「異業種が一つのデータを囲み、互いの専門分野からの知恵を出し合い解釈や発想の幅を広げること」だと思っています。今回もそういった貴重な時間と場を共有して下さったSVの方々、参加者の方々に感謝しています。また合宿を運営実行してくれた事務局の方々にもお礼申し上げます。

【SV コメント】

倉田 貞美（浜松医科大学）

1. 分析テーマを絞る

問題意識を抱くに至った背景を研究的視点で吟味して研究テーマは設定されていきますが、今回、1グループメンバーの皆様には研究テーマ、目的や意義、対象者の選定条件等の資料が事前に配信されておりませんでした。メンバーの皆様は事前にインタビュー内容だけが送付されたので、それをどのような視点で熟読するのか戸惑われたとのことでした。私はそのことをワークショップが開催されるまで気づいておらず、研究背景・目的等について当日説明となってしまったことは申し訳なかったと思っています。DP の方も、SV 担当者から連絡があるのを待っておられたとのことでしたので、今後は、できれば事前にメンバーの方々と若干のやり取りができるのが好ましいのかもしれない。

M-GTA でも当然ながら、この研究がどのような立場から、何を明らかにしようとしているのか、それを明らかにすることの意義は何かを踏まえることは極めて重要です。その吟味過程を経て研究テーマを分析テーマに絞り込む作業に、上のような事情から長い時間を費やしてしまった。それぞれが、DP 提供者の意向を知らない状況で熟読し(?)解釈してきたので、それぞれの解釈の差に微妙なずれがあり、改めて一から読んで理解しなおさなければならないこともあって、ディスカッションを深めていくのは容易ではなく、手間取ってしまってお迷惑をおかけしたと思います。

しかし、逆に、あらためてその場で研究者からの説明を受けながら、メンバー間で咀嚼しながら試行錯誤できて、時間はかかったが分析テーマと分析焦点者を設定するその重要性は実体験されたのではないのでしょうか。

2. 概念生成

既成の成語を用いやすいこと、教科書的で間違いでないけれどデータにピタッとしない言葉になりやすいこと、抽象度の高い言葉を使いやすいこと、表面的に現象をとらえ平易な言葉に置き換えるだけで、その言葉に含まれている対象者の思いを深く探る視点が欠けていること等に気づき、分析テーマと分析焦点者から“解釈すること”の一端を考える機会になったと思います。表現されたその言葉の奥にある意味を、示すことができていた概念を成立させるのは、そんなに簡単なことではなく、概念が簡単にいくつもぼんぼん出てくるはずがないのだということを経験的に知っていたかったのではないのでしょうか。

3. 概念間の関係性、およびカテゴリー生成

メンバーの皆様の、概念間の関係性、およびカテゴリー生成について“分きたい”という強い思いが伝わってきました。分析テーマの設定に手間取って時間が十分ではなかったことが影響して、その強い願いに十分にこたえられなかったと思っています。ただ、語っていただいた内容を分析テーマに照らし、分析対象者にとってどのような意味なのかを熟考し、丁寧に一つ一つ概念として作っていく作業を地道に積み重ねていくと、結果として、どうしても概念と概念の関係性が見えてくるということをお伝えしたいと思います。今回は入口に少し足を踏み入れる程度で終わってしまいましたが、今後につなげていただきたいと願っております。

4. その他

White Board に記録しているとそれに時間がとられてしまい、SV がメンバーの思考についていけない空白が生じてしまい、話されている内容を把握し、メンバーの意向に沿って、的確に取捨選択し話し合いを充実させることができなかった。要するに「聞くと書く」の両立が難しかった。この点における舵取りの在り方を検討できたらと願っております。メンバーの皆様にもご協力いただいてもいいのかもしれませんが。

【第2グループ】

高丸 理香（お茶の水女子大学大学院）

Rika TAKAMARU : Graduate School of Humanities and Sciences, Ochanomizu University

海外駐在員妻の生活適応

Family-life Adjustment of Japanese Expatriate Housewives)

1. 研究経緯

企業のグローバル化に伴い、海外へ派遣される社員（駐在員）やその家族は増加している（外務省，2013）。新参者である駐在員家族が生活に適応していくためには、現地の人々や環境との連続した主体的能動的な相互行為による「つながり」作りの成否が関連しており（小倉，2002）、多様な駐在員家族の生活適応の様態を、現地におけるコミュニケーションの視角から読み解く必要がある。特に、「家庭生活」における家族関係や友人・知人関係に注目した知見の蓄積は重要な課題と言える。

2. 研究目的および分析テーマ

- ①研究目的: 駐在員妻の友人・知人コミュニケーションの関係づくりに注目し、どのように現地の（家庭）生活に適応していくのかを明らかにする。これにより、現地生活において、駐在員家族に必要な支援が何かを探る。
- ②研究テーマ: 駐在員妻は、現地の生活に適応するために、どのような友人・知人コミュニケーションを行なっているのか？駐在員妻ならではの葛藤から適応に至るメカニズム（プロセス）を、社会・文化的相互作用に着目して明らかにする。
- ③分析テーマ: 駐在員妻が経験した生活問題（葛藤、トラブルなど）に焦点化し、それらの問題を乗り越えるために、どのような家族間、友人・知人間のやり取りを行なっているか。

3. 研究方法

- ①調査期間: 2011年4月～10月

②M-GTAを選択した理由:相互作用の特性、細かな動きをとらえることが必要なためM-GTAを選択。

③分析焦点者:夫の海外転勤決定に伴い渡航し、夫の帰国まで同行していた妻

④協力者:

4. 現象特性

現地で出会った人々との相互作用を通して、自分や家族が快適だと思える生活環境を形成していく現象。

5. 提供データについて

データ1:現地生活を通して、不適応感を強く持ち続けていたケース

駐在地:中国、家族構成:夫

データ2:渡航当初は不適応感が強かったが、帰国時には適応感を強く持つに至ったケース

駐在地:ドイツ、家族構成:夫+子ども(未就学児)

感想

この度は、DP として参加するという貴重な機会をいただき本当にありがとうございました。また、SV の宮崎先生、佐川先生には、データを通して、多くのことをご教授いただけ、さらに、グループのメンバーの皆さんには、多角な視点を学ばせていただき、本当に感謝申し上げます。

振り返りまして、今回の研究会でDPとして得ることができたものとして、「思い込みに気付く」ことが一番だったように思います。実は、今回提供させていただいたデータは、修士論文の際にサンプリングしたデータであり、これまで何度も何度も分析を繰り返してきたものです。そのため、正直なところ、自分のなかでは、やり尽くした感を持っておりました。ところが、実際に、SV の先生方のリードのもと、メンバーの皆さまからのいろいろなアイデアからは、同じような概念でも、視点がまったく違った定義や解釈があり、さらに、カテゴリー生成の段階になると、私がこれまで思いも付かなかったプロセスが出来上がっていきました。もちろん、研究する人間や分析テーマが異なると、違ったプロセスが見えてくるというのは頭では分かっていたつもりでしたが、実際に違った景色を見せていただいたことで、ようやく腑に落ちた心持ちです。

概念生成の分析手順において学んだことは、in vivo の落とし穴を実感することが出来た点です。これまで、in vivo の良さや注意点は木下先生のご著書を参考に、しっかり念頭に置いて分析を進めてきたつもりでしたが、今回、自分のデータを使用させていただいたことで、in vivo に囚われてしまっていたことに気づきました。さっそく、帰宅後、もう一度、これまでの自分の分析してきた結果図を見つめ直してみると、モヤモヤしていた部分の原因が in vivo の呪縛だったのかかもしれないと思ひ至りました。データの中でも、語りが豊富で魅力的な言葉に、ついつい思考がひっぱられてしまい、別のデータにも、その魅力に解釈が引き寄せられてしまうのですが、あまり言葉の虜にならず、

あくまでも冷静に、腰を据えて、一つ一つのデータと向き合わなくてはならないと再確認することができました。

これから博士論文のためのサンプリングが始まりますが、その前に、未熟な部分、陥りがちな落とし穴に気付かせていただけたこと、今回 DP として参加させていただけたことは、本当にラッキーでした。これからも、皆さまと一緒に精進させていただけたらと思います。

世話人の先生方、SV の宮川先生、佐川先生、参加者の皆さま、ありがとうございました。

【SVコメント】

宮崎 貴久子（京都大学大学院医学研究科）

グループ2の SV を佐川先生と一緒に担当させていただき、多くのことを学ばせて頂きました。DP は高丸さんが、海外駐在員のご家族に関するインタビューデータを2本準備下さいました。

佐川先生のご尽力で、合同合宿初日は西里駅前の青々とした田圃の向こうに見える、熊本保健科学大学キャンパスで開催されました。木下先生のご講演の後、グループごとに分かれてセッションが始まりました。グループ2は、M-GTA 経験年数が10年から1ヶ月ぐらいと幅広く、さまざまな習熟度の方がいらっしゃいました。

1 日目は、研究概要の理解、M-GTA の基本再確認、分析焦点者と分析テーマの検討、分析シートの使い方の説明でした。

まず、DP の高丸さんから、研究の概要を説明頂きました。高丸さんは種々の質問に丁寧に的確に応答下さり、研究全体の理解が深められたと思います。分析焦点者と分析テーマを念頭に置きつつ、始めに取り掛かる1本目を決めました。対極的なデータ2本をご用意頂きましたので、どちらから取り掛かるか迷いつつ、最後はエイヤツと1本目を決めました。分析テーマの検討にも時間がかかりましたが、全員で意見交換をしながら丁寧に検討できたのではないかと思います。

初学者の方も木下先生のご著書を読んできて下さってはいたのですが、いざ分析に取り掛かると、手順を具体的に確認する必要があるようでした。概念生成の前に、分析シートの使い方を説明しました。経時的説明とプロセスの違いなど、M-GTA の基本的考え方についての質疑応答もあり、分析シートの使い方の説明までで 1 日目が終了しました。宿題で、概念を2つ作ってくることにいたしました。

2日目は、分析テーマの再考、分析焦点者の確認、概念間の関係性、カテゴリー間の検討、カテゴリー名の考え方、プロセスの検討でした。

会場は熊本城近くの桜の馬場城彩苑の広いホールで、グループごとに集まって分析を開始しました。まず、分析テーマの確認です。宿題の概念生成に取り組んだ結果、分析テーマを再考する必要が生じました。分析テーマは、実際に分析に取り掛かってからも検討を重ねるという過程を学んでいただけたであろうと考えます。次に分析焦点者は、1 本目分析データの A さんご本人ではないことを確認しました。その後、各自が生成した概念名を大きな付箋紙に書き、模造紙の上で関係

性の検討に入りました。模造紙上の概念間の全体像を俯瞰し把握するために、みなさまが立ち上がったの検討になりました。「スタート」「分岐点」「つながり」を意識しながら付箋を動かし、プロセスがおぼろげながら浮かび上がってきました。カテゴリー名は、データのバリエーションや概念名に付された説明的な「ことば」に引っ張られます。佐川先生から、概念名から如何に抽象度をあげていくことが必要か、との指摘を頂きました。分析に取り掛かったのは、2本ご提出いただいたデータのうちの1本目でした。しかし、もう1本のデータも視野にいれると、我々が今ここで検討しているカテゴリーが言わんとすることは何か？と考えざるを得ません。この過程を経て、概念名やカテゴリー名の抽象度を上げる必要性を実感いたしました。対極的なデータを提供くださった DP のおかげでもあります。今後生成されるであろう概念を想定して、模造紙上に未記入の付箋紙を張りながらプロセスの検討を続けました。データの全体的なプロセスの概要を予感しつつ、ストーリーラインの検討まで進めずに終了時間を迎えました。

SV が M-GTA の初歩的な質問に答えるなどで時間を費やした感も否めず、経験者の方にはストーリーラインの検討にまで進めずに、申し訳なかったという思いが残ります。合宿のグループ構成で習熟度を考慮するか否かについては、今後の課題とさせていただきます。習熟度がある程度揃っていれば、準備状況に応じた分析に取り組めて効率よく学習できます。一方で、習熟度に幅があるグループでは、経験者が具体的な例示で説明役を担うなどで、次期リーダーの育成が図られます。グループ 2 では後者の流れが自然とできて、経験者の方がグループをサポートして下さいました。佐川先生、高丸さん、第 2 グループのみなさまと共に素晴らしい体験をさせて頂きました。心より感謝申し上げます。またお目に掛りましょう。

【第 3 グループ】

小倉 啓子（ヤマザキ学園大学）

KeiKo OGURA : Yamazaki-Gakuen University

“Qualitative Analysis of the Dog and Cat Owners’ Care Process for Medical Treatment and Terminal Care: Interview Survey of Pet Owners Initially Selecting Secondary Veterinary Care”

1. 問題と目的:

イヌ・ネコの日常的飼育ケア・プロセスについて飼い主にインタビュー調査を行っているが、飼育ケアの重大局面は病気、死別に関わることであることがわかる。多くの飼い主は地域の掛け付け獣医師が出来る範囲で治療や死別までのケアを行っているが、高額な治療費がかかる高度獣医療機関での診療を選択した飼い主もあり、そのような飼い主は増えているという。その理由として、ペットは家族同様の存在だから、掛け替えのない存在だから、ゆとりがあるからなどと説明されている。しかし、イヌ・ネコの治療と看取りを地域の獣医療で行う飼い主も多いことを考えると、高度獣医

療を選択する飼い主の認識や感情、状況には特有のものがあるのではないかと考えられる。

そこで、本研究の目的を、高度獣医療機関での診療と死を経験したイヌネコ飼い主は、どのような周囲との相互作用を経て高度獣医療機関の診療を選択し、ある治療法を選択したのか。この過程をインタビュー調査によって明らかにして、飼い主サポートの知見を得ることとした。

2. 方法

①データ収集の期間・対象者：調査期間は2009年12月から2012年1月である。対象者は9年から1年前にイヌ・ネコの診療・看取りを初めて大学病院など2次医療機関で行ったイヌ・ネコの飼い主各3名の合計6名で、東京都内と近郊に住む40代から50代の女性である。イヌ・ネコの発病年齢は1歳、4歳、5歳、9歳が各1頭、11歳が2頭で、病名は悪性腫瘍が4例、腎不全、腸閉塞と免疫介在性溶血性貧血が各1例である。治療は抗がん剤と放射線、東洋医学、外科手術、ワクチン、輸血、食餌療法などであり、治療開始後の生存期間は4か月、5か月、9か月、1年半が各1例、3年が2例である。

②インタビュー：90分から120分の半構造化インタビューを行い、録音の許可を得て、逐語録を作成した。基本的な質問は、①2次獣医療受診までの経験：発病、診断、治療経過、②2次獣医療機関での経験：獣医療、看護の過程、その過程での獣医師や動物看護師、家族などや周りの人々とのやり取り、困難やサポート、飼い主の気持ちや考え、行動である。病院の領収書や処方箋、病状や食餌などの記録、写真などを参考にしながら、自由に語ってもらった。筆者は心理学専攻で獣医学領域外のため、診療に関する飼い主の発言はそのまま記録した。

注：データ提供については、飼い主さんの了解を得た。氏名・場所・機関名は変更してある。発病から死亡まで経過が長く、複雑で、データ分量が多いため、今回は発病から高度医療機関を選択し、治療の結果、小康状態になるまでのデータを取り上げた。また、類似比較、対極比較がしやすいように複数の飼い主のデータを抜粋して提示した。

感想

今回の合同研究で、提供したデータは、「イヌ・ネコの診療に高度医療機関を選択し、その機関で死別までを経験した飼い主が、どのような獣医療体験をしたのか」という関心から収集したインタビュー記録である。

参加者は人間同士の事柄に関心が強いと思われるので、イヌ・ネコに関する人間の行動に関心を持っていただけるかが心配であった。幸いにも、SVor の川崎医療福祉大学 長崎和則先生と桜美林大学 丹野ひろみ先生にリーダーを務めていただき、参加者の皆さまにも関心をもって勉強の材料にして下さったのではないかと、ほっとしたり、有り難く感じたりしている。

今回のデータは一人のインタビューをそのまま提出したいのではなく、イヌ・ネコの看病・死別体験の最初の部分だけを抜粋して5例を示した。その理由は、イヌ・ネコの体調変化から死までの過

程は変化の多い長期的なプロセスを辿るので、全体データを用いると、たとえ 1 名分であっても、6, 7 時間の分析時間では全体像を見ることは難しく、むしろ分析の注意が拡散してしまうのではないかと考えたからである。そこで、体調変化から高度獣医療機関での診療選択と初期の治療選択までの短期間を取り上げ、比較分析出来るように5例のデータを示した次第である。この方法が良かったかどうか、両面があると思う。

というのは、短期間のデータなので分析テーマ設定、概念生成、カテゴリー化を行いやすいメリットがある反面、5例を準備しても、結局使用したのは1名分のデータだけであった。実際には他の4例と比較分析をする余裕はなかったからである。それだけ、丁寧な分析過程が求められるということではないかと思う。

以上のことから考えると、6, 7時間の勉強に有効なデータのあり方を考える必要があると思われる。参加者にはデータの選択肢はないので、学習目的にあったデータについて、主催者側が検討する必要があると思われる。DP としては、提供したデータが効果的な学習の素材になることを、何よりも願っている。

【SVコメント】

丹野 ひろみ（桜美林大学臨床心理センター）

私たちのグループは、総勢 13 名でした。2日間のワークショップですが、M-GTA の分析作業の全体を学ぶという、“タフな仕事”に取り組みました。

第 1 日目は、まず、自己紹介からスタートしました。研究領域・関心、分析作業における自己課題、そして地元自慢。少し緊張がほぐれたところで、分析焦点者、分析テーマの設定作業に入りました。M-GTA に関して、まったくの初心である方から、定例会で構想発表・研究発表を経験した方、論文を書き上げた方まで、メンバーの皆さんはそれぞれ経験が異なりました。私たちのグループでは、先に進むことより、概念生成の作業を丁寧に行うことにしました。データプレゼンターの小倉先生より、研究の目的や方法、データの説明をしていただきました。このとき、長崎先生から「研究関心」の明確化の問いがなされました。この明確化が分析焦点者と分析テーマの設定作業において重要だったと私は感じました。次の作業、分析焦点者と分析テーマの設定では、メンバーの皆さんから、候補をあげてもらい、比較検討しました。「外から見える動き」に注目し、分析テーマを設定しました。さらに、どのデータから分析を開始するかも検討しました。データは抜粋ながらも、5 事例かなり、実際の分析に近い形で、作業を開始することができました。

最初のデータの中から、分析テーマに照らして、一番気になる部分に着目し、概念生成を行いました。グループ全体で、定義と概念名の確定作業を行いました。このとき、相互作用に着目すること、援助に役立つモデルを生成するという視点からの概念生成、動きの見える概念とすることの重要性が、何度か繰り返し語られ、時間一杯ねばって、2 つの概念が生成されました。最後に、今日 1 日を振り返り、「各自、もう 1 概念を自分で生成する」という宿題がでた後、城見櫓へ”進軍”しま

した。

第2日目は、宿題をやってみたところでの感想・疑問を話すところから始めました。各自が作成してきた分析ワークシートを集め、同じ具体例に注目している概念同士を比較検討しました。つまり、概念生成に関して、定義や概念名のいくつかの候補があると考え、分析ワークシートの作成者がそれぞれプレゼンテーションを行い、確定作業を行いました。

確定しきれなかった概念もありましたが、全部で11概念を生成し、それをポストイットに書き写し、3テーブルに別れて、概念間の関連性やプロセスを検討しました。最後には、グループでの議論をふまえて、プロセスを発表しました。不思議なことに(実は、自然なことかもしれませんが)、ストーリーラインとして語られていました。その後、ワークショップ全体を振り返り、短いものの濃密な2日間を終えました。

時間が短く、グループ全体として分析作業を行うことに力点が置かれ、各自が自分の分析を振り返り学んでいくことに十分な時間をさけなかったように思えたこともあり、スーパーバイザーの私としては、もう少し工夫の余地があったのではないかと考えています。

しかし、メンバーの皆さんが、それぞれの研究をする中で、今回の体験を振り返り、実際の分析作業にいかしていってくださると願っています。

実は、私は新人スーパーバイザーで、全体の司会をさせていただきながら、もう1人のスーパーバイザーである長崎先生やデータプレゼンターである小倉先生の的確な問いかけやコメントを聞かせていただきながら、同時に学ばせていただきました。メンバーの皆さんの「積極的に発言し、学んでいこうという姿勢」が、私たちのグループを作っていたのだと思います。スーパーバイザー、メンバーという役割の違いはありましたが、真摯にM-GTAに取り組んだという2日間であったと思います。あらためて、皆さんに感謝したいと思います。

【第4グループ】

阿部 正子（長野県看護大学母性・助産看護学分野）

Masako ABE : Nagano College of Nursing, Department of Maternal Nursing & Women's Health

助産師の卒後1年間における職場適応と職業アイデンティティの形成過程

The process of work adjustment and establish professional identity among newly graduated midwives.

1. 研究テーマ

「助産師の卒後1年間における職場適応と職業的アイデンティティの形成過程」

＜目的＞

現在、日本の看護職への社会の期待は大きく広がっており、助産師活動においても、看護職と

して量質ともに高度で多面的な知識と技術に基づいた能力の養成が重要との認識が強まっている。助産師教育の推移はそうした社会変動に対応して多様化し、いくつかの課題を有しながらも、4年制大学にカリキュラムが設置されているのが趨勢である。今の社会的ニーズに対応し自律した助産師の育成には、資格取得後の助産活動を行える能力の基準を見極めた教育が必要であり、4年制という限られた条件のもとに実施されている本学の助産師養成カリキュラムの工夫を検討することは喫緊の課題である。そこで本研究では、本学を卒業した助産師の卒後1年間における職場適応と職業的アイデンティティの形成過程について明らかにすることを目的とする。

<背景>

日本における助産師教育は4年制大学(学士課程)での選択履修、1年の教育課程(専門学校、短期大学専攻科、大学専攻科)、大学院修士課程2年間の教育と教育方法は多様である。

4年制大学における統合カリキュラムの助産師教育課程は、過密スケジュールや卒業時の達成レベルの低さ、養成数の不足の予測、実習場所の確保の困難さなど、多くの課題が指摘されている。また新卒助産師のリアリティショックの実態調査では、4年制大学群は専攻科群、専門学校群に比べて周産期ケアを行う際のリアリティショックが高い実態が報告されており、教育期間が短いことが大きな要因との指摘がある。一方、看護系大学における統合カリキュラムで教育を受けた助産師のキャリア発達の特性についてインタビュー調査を実施した結果、自己評価の適切性、寄り添うケア、クリティカルシンキング能力、自己開発能力、キャリア発達の柔軟性などが認められ、課程による顕著な違いは認められなかったとの報告もある。

こうした教育課程の違いによる卒後のキャリア発達に注目した調査は増えつつあるが、新卒助産師の視点から、職場適応や職業的アイデンティティの形成プロセスについて質的に探究した成果の蓄積は十分とは言えない。

2. 方法

調査期間:2011年9月～2013年3月

調査対象者:本学で助産課程を修了し、助産師として勤務する卒後1年目の助産師15名(現時点では8名が終了している)。勤務先は県内であることは問わない。

調査方法:1グループ3～5名程度のグループインタビューを実施。1時間半を予定。インタビュー内容は対象者の同意を得てボイスレコーダーに録音する。

調査内容:「職業人として就職してから1年間の印象深い経験とその意味づけ」をテーマに、肯定的感情や否定的感情を伴う体験、学生時代と現在の仕事認識のギャップ、先輩からの支援、印象深い対象者とのかかわり等について、インタビューガイドに沿って聞き取りを行う。

3. M-GTAに適した研究か

新卒助産師が卒後1年間の臨床経験を積む中で、先輩助産師や同期、大学時代の同級生等との相互作用を通じて成長するプロセスがあると推察される。そのため、困難を乗り越え成長する起点などが明らかになれば、リアリティショックを経験する新人の育成に具体的な示唆を提供できる。

感想

合同研究会では第 4 グループのデータ提供者として参加させていただきました。今回は助産師教育への示唆を得るために実施した『助産師の卒後 1 年間における職場適応と職業的アイデンティティの形成過程』という調査のデータを提供しました。これはグループインタビューで、3 名の学生たちに 2 時間半の聞き取りをしたものだったので、相当なボリュームでした。それにもかかわらず、グループメンバーの皆さんはデータを読み込んできて下さり、藤好さんや木下先生の SV を受けながら分析テーマの設定が比較的スムーズにできました。

現象特性としては、卒業生たちは就職するとクリティカルな状況に対応できず、リアリティショックを感じていったん落ち込みますが、患者からのポジティブなフィードバックや先輩助産師たちのアドバイスによって状況の意味理解が深まり、それに対応できるスキルも主体的に身に着ける努力をしていきながら、「助産師」としての自分を模索するプロセスであると表現できます。

2 日間という短い間で、概念生成や概念間同士の関連を検討し、最終的に結果図までたどり着けたという過程をグループで体験できたことは、M-GTA の分析初期におけるグループでの解釈を広げるセッションがいかにか大事かということを改めて実感する機会となりました。私自身、データが膨大で、今回のセッションに参加するまでは“途方に暮れていた”というのが率直な感想ですが、SV の働きかけとグループメンバーの多様な意見のおかげで、やっと離陸が叶うという手応えと道筋が見えてきました。

まだ分析は途中ではありますが、今回の分析を基盤に来年 3 月に行われる助産学会にエントリーしました。緻密な分析はまだこれから進めていく必要はありますが、取り急ぎ形にして発表する素地が作れたことは、合同研究会でデータ提供者をさせていただいたおかげと感謝しています。この勢いのまま、論文作成までこぎつけたいと思います。ありがとうございました。

【SV コメント】

藤好 貴子（福岡女学院看護大学）

M-GTA 研究会 第3回合同研究会を終えて

このたびは M-GTA 合同研究会に SV として参加させていただき、私自身もとても貴重な経験となりました。急遽、グループに木下先生が参加してくださるというサプライズの中、データ提供者である阿部先生にもご協力いただき和やかなスタートとなりました。

1 日目、全員の自己紹介から始めましたが、研究会に所属の方、実際に M-GTA を用いて論文を書いた経験がある方、初学の方と様々な方がいらっしやいました。初めに、データに慣れることとして、各自のインタビューを読んだの印象や研究への質問を出していききました。阿部先生より研究概要の説明をしていただき、インタビューに出てくる人々の背景や関連する情報を確認していききました。普段、その専門領域では普通に使用している言葉も、領域が異なると意味が通じない場合が

あることや、とる意味合いが微妙に異なるなど、ここでの現象への共通理解は大切なものとなります。その後分析焦点者、分析テーマの設定に移り、この部分は十分に検討を行いました。分析焦点者と分析テーマはどこまで絞り込むとよいのかという点については、まずは絞り込みすぎないように設定をとしましたが、では実際にどこまでの状態が絞り込みすぎない状態なのか、という点がワークショップ参加者の皆さんの関心でした。用いる言葉一つにしてもその言葉自体の概念が大きく抽象度が高いと分析の方向性がわかりにくく、絞り込みすぎるとデータへの着目点が狭められてしまいます。グループでの検討を通して、分析焦点者と分析テーマは決定し、その中の言葉で認識を統一したいものに関しては言葉の定義付けを行いました。その後、分析ワークシート作成に移り、できた方数名にワークシートの発表とそのヴァリエーションに着目した理由を発表していただき、残りは宿題という形で終了しました。

2日目、昨日のワークショップや宿題を通して感じたこと、データの印象をどう捉えているかについて発表し、その後宿題として各自で生成した概念を発表しました。1日目に分析焦点者、分析テーマの設定をしっかり検討したため、概念生成はできて2日目を迎えることができた印象です。昨日の最後同様、各自にワークシートを発表していただき、同じヴァリエーションに着目している概念においては各自のその解釈の違いを検討していきました。また、定義が近い概念なども確認し、概念間の関係性を検討しました。そのヴァリエーションに着目した理由や自身が解釈のために必要としたデータの範囲など、検討を通しての気付きはメモに残し全員で分析の過程を共有していきました。その後、短時間となってしまいましたが結果図を作成し、ストーリーラインはきちんとしたものにはありませんでしたが、プロセスの確認を行うことができました。

実際にデータを用いて様々な方と検討しながら、分析過程を経験することは大変貴重なことです。参加者の中にはM-GTAの経験がなく、近くにM-GTAを用いる研究者がいない状況のため書籍での学びの途中といった方もいらっしゃいました。ワークショップに参加される方には、分析のプロセスを経験として実感していただければと思います。今回のこの経験が、自身が実際に分析を行うときに生きてきます。分析テーマ、分析焦点者の設定は特に丁寧に行うと思っていても、迷いが出てきてしまうこともあると思います。ワークシートの解釈にデータに向き合う中でも分析が進めにくい時もあるかもしれません。その時に思い出してください。また、今回のワークショップは研究時の悩みや自身の研究の方向性など、M-GTAを学ぶ者同士語り合うことも大切な学びの場となりました。少しでも多く、この経験からの学びを持って帰っていただければと思います。

今回、SVとして貴重な場を与えていただいたすべての皆様に感謝いたします。

【第5グループ】

大高 靖史（日本医科大学 精神医学教室）

Yasushi OTAKA : Department of Neuropsychiatry, Nippon Medical School

自殺未遂者のリカバリープロセスに関する研究

Healing and recovering process after suicide attempt.

背景と目的: 日本では、年間自殺者数はおよそ3万人という高い水準が続いている。国は、平成18年に「自殺対策基本法」を成立させ、さらに翌19年、自殺対策を進めていく際の具体的指針となる「自殺総合対策大綱」を定めた。それらを基に、各自治体や医療機関、各種相談機関等の施設レベルで多様な対策が講じられ、まさに国を挙げて自殺を防ぐための種々の取り組みが行われているところである。

自殺者の背後には10-20倍の数の自殺未遂者(未遂者)の存在が推計されており、未遂者は自殺死亡のリスクが非常に高い集団であるとされ、医療機関をはじめ、福祉、司法、教育等の領域自殺再発予防のための関わりを行う支援者が増えてきている。それら自殺再発予防の臨床において支援者は、未遂者が自殺行動を起こした後に彼らとかかわりを持ち、その回復のプロセスがいかに進んでいくか、また自身が如何にかかわる必要があるか、ということが主な関心となる。このような、自殺未遂者が「いかに回復していくか」という、回復に至る経過に着目した研究は少なく、我が国では皆無である。

本研究では、自殺未遂者が回復していく過程において面接調査を実施し、彼らの回復の過程で必要なものは何か、そして、どのような経過を辿り、現在まで生存できたのかを明らかにし、自殺未遂者と関わりを持つ対人支援援助専門家(医師、看護師、ソーシャルワーカー、心理士等)が自殺未遂者の個別的支援を行っていく際に、有益となる視点を提示することを目的とする。

方法:

対象者: 2009.1-2013.6に日本医科大学付属病院(以下、当院とする)高度救命救急センターに自殺企図の結果入院となった者のうち、下記の適格性を備えた者を対象とした。(目標対象者数は10~20名とした。)

適格性の基準: ①明確に自殺の意図を持って自傷行為に及んだ結果、入院となった者、②現在も当院外来通院中の患者である者、③主治医により、面接調査の実施が可能と判断された者

データ収集の方法: 適格性の基準を満たした対象者の外来受診時に、主治医より研究内容の説明を行い、発表者がその内容を補足した。書面による説明に対し、同様に書面にて同意が得られたものに対し、外来診察の前後で半構造化面接による調査を実施した。調査は、自殺企図当時の状況を記録した診療録の情報を元に、入院のエピソードから退院後、現在に至るまでの状況について対象者に回想してもらう形で実施した。面接時間は、40-70 分程度であり、面接時の会話をICレコーダーにて記録した。調査実施に伴い想定された有害事象(自身の過去の振り返りを通して被る精神的苦痛、希死念慮の再燃等)に常に注意をしながら実施し、有害事象が発生した場合または危険性が高まったと判断された場合は即刻中止することとした。IC レコーダーの情報をテキストデータに起こし、個人識別情報は分析に支障の無い範囲で削除、加工した。発表者は、調査実施施設の職員として、調査対象者すべての自殺企図当時に関わりを持って

おり、対象者の側からしても、面識があるスタッフである。また、調査は対象者のかかりつけ医療機関内で実施されたが、調査協力の如何や、語る内容は対象者の不利益に一切つながらないことを伝えた。

感想

私は、研究会参加後 9 月 11 日から 13 日まで北九州で開催された日本自殺予防学会で、今回 DP したデータを含む研究データの間中解析を発表し、自分の提示した理論に関して第一線の実践家の方から様々なご意見を頂いてきました。早いものでもう研究会から 2 週間がたってしまい、ようやく筆をとっております。まず、第3回合同研究会という貴重な場で DP を担当させて頂き、ありがとうございました。ご高配を賜りました先生方に心より感謝申し上げます。

私は、去る 7 月の修士論文発表会でも中間報告をさせて頂きました。その際に SV をご担当頂いた阿部先生からご助言を頂き、今回の合同研究会の DP として発表させて頂くことになりました。会員としても新参者の私は、当然ながら DP は初めての経験でしたが、SV の先生からのご指摘や、参加者の皆さまの多様な背景から出てくる意見や解釈を見ることが出来、大変勉強になり、当初考えていた以上に、非常に有意義な時間となりました。

研究会の流れは、私たちのグループでは初日に分析焦点者、分析テーマの絞り込みを行うところまでをじっくりと行いました。そして、宿題として各自で分析ワークシートを使いながら概念を作って二日目に持参するということに致しました。2 日目は、各自作ってきた概念のチェックと、その発表を行いました。そして、概念を一つの結果図にまとめ、全体のプロセスとしての動きを視覚的に表すところまでを行いました。

当初私は、漠然とした研究テーマで集めたデータが手元にある状態で、分析焦点者と分析テーマの設定がしっかりと出来ていませんでした。今回の研究会でははじめの作業も SV の林先生、根本先生、そして参加者の皆さまとの共同作業で絞り込みを行いました。特に、根本先生を中心に「今回の対象者はどういった集団なのか」、また「私自身が、今回のデータで見ていきたいもの、明らかにしていきたいものは何なのか」といったことを確認して頂き、私の中の問題意識や研究に必要な視点をじっくりと深めて下さいました。今回、SV の先生方とのやり取りを通じて、分析焦点者、及び分析テーマの設定の大切さと、同時に個人作業で行う難しさを感じました。私自身、自分のことを「物事に曖昧な部分があってもそれを見過ごして先に進んでしまうことが多い」人間であるなあ、と痛感いたしました。今回、先生方や、参加者の皆さまとの丁寧な確認作業を通じ、グループ全体で今回のデータ分析における分析焦点者、分析テーマが「明らかになっていく」感覚を味わうことが出来たことが、私にとって最大のお土産になりました。

また、2 日目は SV の先生のご助言もあり、模造紙を壁に貼って、グループ全員で概念、カテゴリーについて吟味し、結果図を作っていました。各自付箋に概念名を書いて来ることにしたのですが、それらの概念が、視覚的にカテゴリーとしてまとまっていき、かつ最終的に動きのある結果図

として集約されていくプロセスを体験出来ました。私は、自分自身の研究でちょうど概念を作り始めた段階でしたので、ここでの作業が大変役に立ちました。大きな模造紙を使い、視覚的に全体を視えるようにして結果図を作っていくというのが、自分にはとても合ったやり方だと感じました。今回、結果図が出来上がった時には、グループ全体に高揚感と達成感を味わえたことは、私自身の研究を進める大きなモチベーションにもなりました。

最後に、SV の先生と、参加者の皆さまにお礼申し上げます。大変貴重な時間を皆さまと過ごせて心より嬉しく思います。本当に、ありがとうございました。

【SV コメント】

根本 愛子（成蹊大学）

今回の合同研究会では、第5グループのSVを担当させていただきました。ご一緒させていただいたSVの林先生と相談したうえで、今回の目的を「参加者の皆さんが『プロセスってこういうことか！』と最後に感じられるようにする」にしました。そこで、1日目は分析焦点者と分析テーマの設定を全員で行い、概念生成は宿題としました。2日目には各自作成してきた概念を突き合わせ、プロセスを作っていました。最後に全体の振り返りを行いました。そこで出てきた感想を簡単にまとめると、次のようなものでした。

- ・分析テーマや分析焦点者の設定が大事だということがわかっていたつもりだったが、自分の設定はまだあいまいだったと気がついた。
- ・分析テーマに沿うことを重視することで、プロセスを見ていくとはどういうことかがわかった。
- ・分析テーマを常に意識し、それに沿って分析を進めることでデータの中からマイナスではなくポジティブな概念が出てくることがわかった。
- ・概念はグループ分けをするのではないとわかっていたが、ではどのようにするのがうまく理解できていなかった。今回実際にやってみたことで、自分が何を言いたいのかということが見えてきた。
- ・これまで概念がプロセスになっていくという経験がなかったので、本当にまとまっていく様子を見て、これから自分の分析も頑張ろうと思えた。
- ・ストーリーを持たせるということがよくわからなかったが、「なぜこうした動きになるのか」ということも含めて検討していく必要があるということがわかった。
- ・これまでは分析がいつ終わるかわからないという感じだったが、きちんと概念が結果図にまとまり、分析が終わるというのがわかってよかった。
- ・理論的メモに何を書いてよいかわからなかったが、自分の頭に浮かんだことを言語化し、それを書きとめていけばよいのだと思った。

このように皆さんからは「(わからなかったことが)わかった」ことがあげられましたが、この「わかった」

につながったものが何かは、最後の感想にある「言語化」にまとめられるのではないかと思います。

まず、分析焦点者の設定では、DP の大高さんが「インタビュー対象者の適格性」としていた部分を分析焦点者の形に落とし込むことを行いました。そこで、ここで言われる「適格性」が、インタビュー対象者自身にとってどのような意味を持つのかをかなりしつこく DP に伺い、全員で検討しました。その後の分析テーマの設定では、参加者各自が考えるものを出してもらいましたが、表現の差はあったものの、基本的な部分に大きな違いが見られなかった、つまり、グループ全員の頭の中にある分析テーマに大きな差がなかったのは、分析焦点者を設定する過程でいろいろなことを共有できたからではないかと思います。また、ここに時間をかけたからこそ、その後の分析で「分析テーマでは、分析焦点者にとっては、この概念はどのような意味があるのか」と考えるのが(多少は)楽になったのではないかとともに思います。

そして、各自が生成した概念からプロセスを作る際には、概念名と定義、そして理論的メモの部分を出し合いました。そこで皆さんが気づかれたことは、「(プロセスというのがピンとこないと言ってはいたものの)実はプロセスを感じながら概念を生成させていた」ということ、言い換えれば、分析の際に感じていた何かがプロセスであることを自覚していなかったということに気がついたということです。この気づきは、理論的メモの部分の迷いや感覚的なことまで出し合い、検討できたことによることだと考えています。

データと向かい合っていると、いろいろな考えが浮かんできます。それが明確に何かがわかることもあります。もやもやした何かである場合も少なくありません。それどころか、何かを考えていると認識できていない場合もあります。感じられる何かがあるのか、感じているのならそれが何なのかを明らかにするためには、自分の考えをまずは「言語化」すること、それを精錬させるためにさらに「言語化」していくことが重要だということが、今回のワークショップで実感できたことではないかと思います。

今回は概念名や定義の検討など、あまり扱うことができない部分も多くありました。また、よいデータが採れるか、つまり、よいインタビューができるのかが心配だという感想もあり、課題はまだまだあると感じています。ですが、最終的には「プロセスってこういうことか!」と実感していただけたようですので、当初の目的は達せられたと感じています。

最後になりますが、貴重なデータを提供してくださった DP の大高さん、考えと時間を共有できた参加者の皆さん、未熟な SV である私を暖かく見守ってくださった林先生に心から感謝いたします。準備にあたってくれた先生方にも御礼申し上げます。有意義な 2 日間をありがとうございました。

◇近 況 報 告

(1) 氏名、(2) 所属、(3) 領域、(4) キーワード

(1) 坂上 和子

(2) 認定 NPO 法人病気の子ども支援ネット遊びのボランティア

(3) 社会福祉

(4) 子どもの入院、病院ボランティアコーディネーター

- ① 概念をつくる時相互佐藤を意識すること 時間軸でつくるだけでなく原因があつて結果があるそういう線の引き方も念頭にいれなければと思った
- ② 昨日、データをどういふふうに見ていくか教えてもらって、実際に昨日宿題をもらって概念をつくる時に どの言葉がいいか、日本語を大事にしないとなあと思った 今日みなさんののをまた聞いて、こういう表現がいいなあとか参考になった
- ③ 全体が見えたのが特によかった すなわちインタビューガイドの短縮版、全体がみえた。プロセス図はそれぞれ班によって違うが、それでも根拠に基づいているわけで、こうやってひとつひとつを確認しながら、自分の色メガネをはずして結果図を出す。それがわかった。この研究会にきたのと来ないのでは、全然違う。10でいうと、8くらい理解できたと思う
- ④ この会で研究テーマが一番大きなものだ意識できた。これをたえず念頭において意識しておくことで、人ごとに概念を作ったり、それが出来ることは支援につながることも理解できた 一番大きいのは研究テーマ
- ⑤ いろんな意見をいただいて狭い視野が広がったことがよかった 分析焦点者やテーマは自分では意識はして、頭でわかっていても 実際にわかっていなかった 相互作用をたえず見る、意識しながらやることを再認識した
- ⑥ これまでひとりでやっていたがグループでやることで自分で気づけなかったことが気づけた 今回概念名を作るときに誰との相互作用をいいたいのかなとか、前後のつながりを考えて作った これまでひとつのセンテンスからいっぱいのことが読み取れて定義を作るのが難しかったが、ここでは誰との相互作用のことをいいたいのか抑えながら、強調していいたいことを明確にして、定義や概念を作ることの作業をこころがけた。これまで時間軸でみていたが、そうでなくて、因果関係をみてつながりをもってやってくことわかった。今日、プロセス図をつくる時、それがすつとできた、
- ⑦ これまで大学院生の発表とか聞いて、ふ〜んとなんとなくわかった気になっていただけ 昨日実際にみなさんとやりとりをしてすごく勉強になった 今までは人がやっているのを見てても、自分が出来るとは思わなかったが、質的研究でやっていこうとしているので、これからSVをうけながらなんとかやっていけるんじゃないかと思えるようになった 2 日間の収穫は大きかった
- ⑧ 特に最後の支援につながるものは何か？それが特に意識づけられたこと、再認識した あわせて私は結果図つくるとき頭でイメージする、そのとき、ポストイットを使って可視化する方法、動かして、いいなと思った
- ⑨ 今日結果図つくりながら、概念が重要だと思った 言葉の選択が大事で大切だということ、あとデータ、いいデータとはこういうものかと実感した
- ⑩ たくさんのことが勉強になった やはり動きとか、相互作用を意識して、概念を選ぶとか結果図をつ

くっていくことが大事だと思う。支援をしていくことが研究のテーマに関わってくるので、どこの段階でどんな支援が必要なのかを考えると結果図もみえてくるかなと思った。今回はこれだけいろんなことを語ってくれるデータがあったから概念も出来た。自分の頭の中である程度、こういうことがもしかしたらあるのかなと予測して、インタビューガイドを作ることが重要なこと、ここまでのいいデータがないと、この概念図もできなかったと思う。対極例とか類似例とかいわれてるが、今回のように一つ一つの名まえをつけたり小さな結果図を進めていけば、対極例とか類似例を探しやすいのではないかと思った

小倉 データとして皆さんに満足していただけるか心配していたが、皆さんが関心をもってくださいましたのでその点 安心した

長崎 皆さんの熱心さ、集中力見習いたい もっとバラバラになるかなと思ったがそうでもなくて収れんしていった 説明がうまくなかったとしたら、データをちゃんと読み込めてなかったり、もしかしたら欲しいデータがなかったりしたのかもしれない うまく説明がつかないところは今後の課題としてあるが、とても収れんしていたと思う、皆さんの質の良さを思った

丹野 みなさんの力でここまで来れた 概念生成のところで時間をとった 苦労も多いが時間をかける必要があった、私にとってもよい学びの機会だった

.....
(1) 坂上真理

(2) 札幌医科大学

(3) リハビリテーション学

(4) 高齢期、作業療法、作業科学

新規で会員となり、初めて合同研究会に参加させていただきました。

M-GTA は、『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践』が出版された頃より、研修会等で実際の分析方法を直に体験したいと思いながらもなかなか実現に至らず、ようやくワークショップに参加することができました。

研究会では、特に分析テーマを設定するまでの過程、実践や応用者の意味について理解を深めることができました。

これまで書籍を読みながら分析(?)をしたことはありましたが、考えていた以上に時間をかけ、吟味するものであることや、何のための概念生成かを改めて知ることができました。「教科書に書いてあるようなことを述べてどうなるんだろう」という先生の言葉に、概念生成に対して長年抱いていた霧が晴れるようでした。

また、多職種のグループ構成も非常に魅力的でした。当たり前に思っていた仕事の言葉や内容が他の職種の方々には全く当たり前ではないことが良くわかり、ショックと共に貴重な気づきとなりま

した。

充実した 2 日間を本当にありがとうございました。

.....

(1)田村愛架

(2)鹿児島大学教育学部

(3)家政学(生活経営学)

(4)多重債務 生活再建 支援

合同研究会のワークショップでは、研究目的である「支援に活かすこと」を意識して、概念生成をする癖がつきました。そうすると、自ずと「誰・何との相互作用か」も考えるようになりました。

M-GTA で分析するなら、合同研究会のワークショップは絶対参加だなと感じました。

貴重な機会をどうもありがとうございました。

.....

◇M-GTA 研究会 第 69 回定例研究会のお知らせ

日時:2014 年 11 月 8 日(土)13:00～18:00

会場:立教大学(池袋キャンパス)10 号館 304 教室

◇編集後記

今夏の豪雨や竜巻などの自然災害は、2011 年 3 月の東日本大震災を思い起こさせます。広島
の土砂災害にみられるように、さまざまな地域に甚大な被害を及ぼし、おおくの尊い命が奪われま
した。「想定外」という言葉があちこちで飛びかっています。私たちは当然のように日々を過ごして
いますが、常に未知のなかに身を置いている存在だといえるでしょう。研究会のメンバーで災害ボ
ランティアとして活動しておられる方もおられることと思います。M-GTA 研究会が会員の皆様にと
って一息つくことのできる支えの場であることを願っています。(浅野)